



誌上自薦句集(令和七年九月)

俳壇

花
水
木

令和七年度 横浜市退職小学校長会 俳句部会 ②

俳句往来 百十号

詠むときも読むときも、認め合い高め合う花水木の仲間

- ・題材や体軀にふさわしいリズム感
- ・春夏秋冬の五感に触れる季節感
- ・自身の心から湧き出る創出感
- ・日常に秘めている夢、ロマン、ポエム、情感
- ・喜怒哀楽に潜むおかしみ、たわむれ、俳諧味 など

特異月、八月を詠んで、読み合う

福田 福郎

特異日は大抵の辞書に載るが、特異月は。七月の豪雨災害時気象庁が使っている以外はないと思う。特異日の代表例が十月十日や十一月三日とすれば、文芸上の特異月は何月か、私は、八月と十二月ではないかと考えている。さて、本句集「花水木」百十号には、次の四句が、掲載されている。

- 語り部の皴ふかぶかと八月来 竹之
- 平和てふつづけば崩るかき氷 信子
- 終戦の映像リアル孟蘭盆会 郁枝
- 八月も慰霊黙禱八十年 正子

この四句の他にも多くの仲間が共感を呼ぶキーワードを詠みこんだ句を出句しているので味わいたい。

似た事象は十二月にも生ずる。敗戦（八月）と開戦（十二月）。現代日本史の甚大禍根が今を生きる私共に刻印されて、「戦争と平和」の痛切な課題となっている。八月と十二月を特異月と考えた所以である。

走馬灯

竹之

語り部の皺ふかぶかと八月来く

自販機の落つる音して原爆忌

来し方の思い出確かと走馬灯

靴音のかるき白露の石畳

八月や

信子

平和てふつづけば崩るかき氷

あの茂り永田洋子らアジトあと

切れやすき輪ゴムや八月十五日

漆黒の闇もつ里の門火かな

谿紅葉

金雄

新茄子しんなすびお供奉まつる母正忌

のうのうと矢守やもり在おわすやわが家窓

黒四の放流とどろく谿紅葉たにもみじ

金時山銀河を断ちて聳え立つ

盆のあとさき

福郎

やり切れぬ異常気象や盆支度

郵便受にポトンと封書秋立ちぬ

年一度訪う実家の精霊棚

秋耕や泥手でたたくぶゆ納ふゆニヶ所

空蟬に

美明

空蟬うつせみに生きる証あかしに心寄よす

原爆忌さんか惨禍の様子永遠に

遊びあと風船すいか西瓜所在なげ

秋よの夜にグラスの氷しずやかに

孟蘭盆会

郁枝

ひびわられて水がほしいと稲さけぶ

夏野菜とれたて届け友の家

富士登山足元はるか花火咲く

終戦の映像リアル孟蘭盆会

夏の日

映夫

朝起きるミンミンゼミに今日は負け

写真展猛暑の中を友うれし

門いに入る青いミカンの数かぞえ

犬友は暑さをさけていつまでも

猛暑

淳子

連日の暑さに耐える吾れをほめ

汗まみれ球児輝く甲子園

今月は戦後八十年思い馳せ

ホームでの流しそうめん楽しみて

虹立ちぬ

和子

我病みて気遣う友あり虹立ちぬ

ステテコの膝に幼子父遙か

十葉の花可憐なり根を残す

化野あだしのや石仏悼む法師蟬

朝顔

佳一

夏空にのぼるマーチに笑顔あり

朝顔を集めて染めるシャツの色

透明のバッグがゆれる夏の朝

夏の花色が溢れる花屋かな

秋の宵

尚之

ぱちぱちと線香花火子らの声

蟻歩われく我足の上旅路とす

秋の宵妻ホーム入りひとり酒

墓洗おのふ己が心に流れゆく

愛犬闘病の夏

驚龍

油蟬や病犬抱いて急ぐ道

愛犬とカヌーで波間遠き夏

犬夢見手足漕ぎつつ夏の野へ

夏草や翔かけて駆かけたり若き犬

酷暑から初秋への風景 誠

オニヤンマ 定雄

百円握り金魚すくいの夜店かな

産卵を見守るオスのオニヤンマ

ガザの姉妹鳥籠開けて土用中

羽光る朝焼けの田のアキアカネ

赤蜻蛉グリーン上のツウパット

川の水タンクで運ぶ稲田へと

ケキヨケキヨの誘い弱し処暑の藪

栗の木の下草刈りや汗涼し

八十年 正子

白雨 篤

八月も慰霊黙禱八十年

真夏日の草生ふ畑に手も出せず

藤袴よあさぎまだらら野遊びす

雨宿り誰が名付けしかこの白雨

サルビアも桔梗も青夏ひと息

津久井路を行くや色なき風の中

百日紅 今夏はずんと 枝を張り

罌堂忌は我が誕生日也今日の月

蟬二つ

一雄

鉢一つ大葉大葉と蓮華かな
れんげ

玄関の前に息絶え蟬二つ
せみ

百日紅四方に花伸び賑わしき

たそがれてやつとひぐらしなりしかな

八ヶ岳

啓子

御柱見上げる果てに神の雲

夏草や柏戸モデルの雷電像

大雷雨野菜喜ぶ八ヶ岳

あこがれの杖突峠雲の峰



編集談話室

◇令和七年度は、俳句部にとって激動の変革の年だったと言つても過言ではありません。

八月十四日、花水木の投句研修会には、ゲストを交え、十二人が参加しました。鷺山龍太郎講師から、スマホによる 구글 フォームを使った投句方法を教えていただきました。画面に沿つて、氏名、俳号、四句、題名などをに入れて送信すると、担当幹事に届く仕組みを構築。声で入力することもできるのです。郵送なしで投句できる方法を活用していけたらと思います。

百六号から継続している「花水木」の冊子のスタイルを維持しながら、投句フォームに寄せられた作品を入れ込んで百十号を作成しました。次の句会でも、この投句方法を生かして進めていきます。従前の方法の投句も併用していきます。
(部長・高橋定雄)

◇百十号の掲載は、入稿順になっています。

お気づきの点がありましたらお知らせください。

◇次の句会は、十二月席会です。

参加しやすいよう午後開始です。皆様おいでください。

・開催日時 令和七年十二月三日(水)

・開催場所 十二時半～十五時半(その後幹事会事務)

・会場 青少年育成センター第二研修室

・投句の締切は、十一月二十七日(木)。郵送必着。

・今回は、全員、事前に投句していただき、当日、句稿を

まとめたものを配り、席会をします。

郵送先 部長 高橋定雄宛(住所は郵送した案内にあります)

または下の投句フォームから、スマホ、PCからの投句もできます。または、二次元コードからスマホで投句可能です。

・季題は秋～冬で四句。

発行 横浜市退職小学校校長会俳句部

代表 高橋定雄

発行日 令和七年九月吉日

編集・印刷 花水木百十号担当幹事



二次元コード